音如谷瓦窯の調査

平城宮跡発掘調査部

前年度に引き続き，日本住宅公団平城ニュータウン造成予定地内遺跡の範囲確認調査を行った。調査地は奈良県側３ヶ所，京都府側２ヶ所であるが，音如谷瓦窯として知られる京都府側１ヶ所で遺構が確認された他は，明確な遺構は検出されなかった。これらについてはすでに奈良県・京都府両教育委員会によって報告されている（『奈良山Ⅱ—平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』1974．4．）ため詳述をさけ，音如谷瓦窯について簡単に報告する。

調査地は音如谷瓦窯の東に接する水田で，灰原３ヶ所，柱穴19ヶ所，溝２条，土壙１ヶ所を検出した。遺構面は水平に近く，瓦生産に際して造成を行っている。柱穴はいずれも一辺20～40cmの円形に近い小規模なもので，工房関係の施設と考えられる。灰原から窯壁破片とともに多量の瓦類を得た。土壙は灰原の下層にあり，土師器・須恵器等の土器類と少量の瓦類が出土した。土壙出土の土器類は，平城宮跡土壙ＳＫ820出土土器と近似し，天平末年頃のものである。瓦類には軒丸瓦が２型式４個体，軒平瓦が７型式19個体ある。類例は平城宮跡や東大寺・唐招提寺・大安寺等の南都諸寺にも見られるが，法華寺阿弥陀浄土院と同型式のものがすべてを占める。当瓦窯が天平宝字三年の光明皇后発願による法華寺阿弥陀浄土院造営に関する瓦窯であることが判明した。

（吉田恵二）

第１図　出土土器　（１～７：須恵器，８～12：土師器）